

国立大学法人広島大学 放射線災害医療研修棟落成式典

来賓挨拶

令和4年7月14日

- ご紹介いただきました原子力規制委員会委員の伴です。原子力規制委員会を代表し、一言、ご挨拶申し上げます。
- 越智学長、神谷センター長はじめ広島大学の関係者の皆様、そして、本日この場にご参加いただいている皆様には、平素より放射線防護ならびに原子力防災のための技術支援・体制構築に御尽力いただき、誠にありがとうございます。この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。
- 皆様ご存知のとおり、原子力災害時の医療に関して、社会的インフラとしての体制整備が求められるようになったきっかけは、1999年に東海村で発生したJCO臨界事故でした。当時、この問題に携わっておられた先生方のご尽力により、医療機関の連携の下で被ばく医療を展開する体制が構築されました。広島大学はこの分野の一大拠点として、西日本ブロック地域の三次被ばく医療機関と位置づけられ、緊急被ばく医療推進センターを核として、被ばく医療のネットワーク構築に指導的な役割を果たしてこられました。
- この緊急被ばく医療体制は、高い線量を被ばくした、あるいは高度に汚染された患者の処置に主眼を置いたものであり、原子力災害によって広い範囲に放射性物質が放出

された状況への対応という点では、決して十分なものではありませんでした。それでも、2011年の東京電力・福島第一原子力発電所事故に際して、広島大学はいち早く緊急被ばく医療支援チームを現地へ派遣し、迅速かつ的確な状況把握に基づいて、総合的な支援を展開してこられました。

- その後、福島第一事故の教訓を踏まえて2015年に原子力災害対策指針が改正され、現在の原子力災害医療体制が構築されましたが、その枠組みにおいても、広島大学には原子力災害医療・総合支援センターおよび高度被ばく医療支援センターとして、引き続き中心的な役割を担っていただいております。
- 原子力災害医療・被ばく医療は、最悪の事態への備えです。その備えが役に立つような事態は、もとより起きてほしくはない。言うなれば、日の目を見るべきではないことのために努力を続けるという、なんとも報われない世界です。そのような分野で、広島大学が長年にわたって地に足のついた活動を展開しておられることには敬服するばかりです。その背景には、やはりこの広島という土地が背負ってきた歴史があるのではないか、そのように感じております。
- 77年前、広島大学医学部の前身である広島県立医学専門学校が開校してわずか半年後に原子爆弾が投下され、その校舎は学生が授業を受けることなく廃墟と化しました。しかし、数奇とも言ふべき巡り合わせで、直前の疎開により直爆を逃れた学生達によって、この地における医学の基礎が築かれ、戦後広島医療を支えてこられたと伺っ

ております。原子力災害医療・被ばく医療に対する広島大学の取り組みには、その先達から脈々と受け継がれてきた、医療人としての矜持を見る思いがいたします。

そのような歴史を持つ広島大学において、今般、放射線災害医療研修棟が整備されたことを大変心強く思います。原子力災害医療という新たな枠組みの下、これまでは体制の構築に鋭意努力してまいりましたが、今後はその体制を充実させるとともに、長期にわたって維持していくことが課題となります。そのためには施設・設備の維持にも増して、人材の育成が重要です。この放射線災害医療研修棟を十二分にご活用いただき、原子力災害医療・総合支援センターおよび高度被ばく医療支援センターとしての機能はもとより、専門的な人材の育成にも一層力を入れていただきたい、そのように期待しております。

- 広島大学が、これまで蓄積してこられた知見・経験、そして人材を通して、今後も原子力災害医療を支えてくださいますよう重ねてお願いするとともに、関係各位の更なるご活躍・ご発展を祈念して、簡単ですが私のご挨拶とさせていただきます。